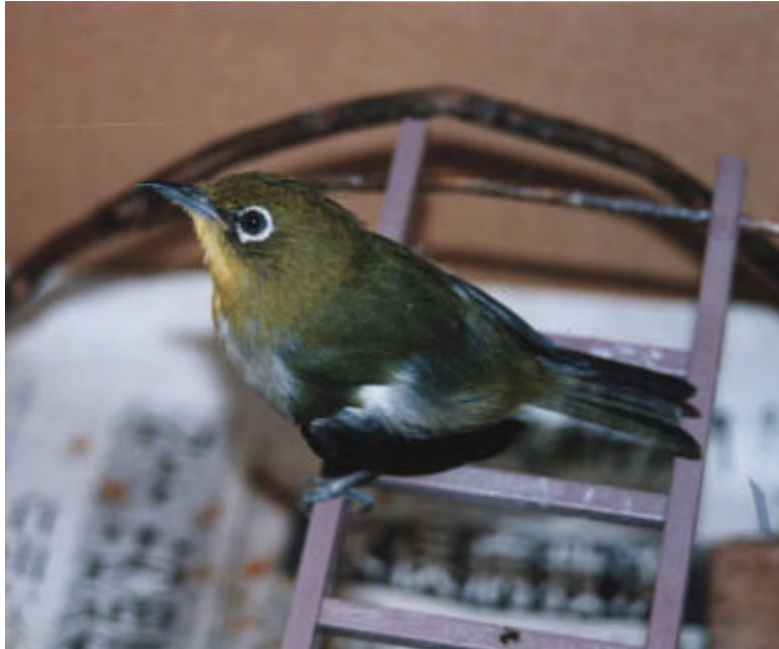


News Letter



小鳥の母さん奮闘記

時は9月半ば頃。私は岩手県にいて、やや急な斜面をくだっていた。ふと、自分の立っている斜面の下方で何か動くものを感じた。これは、とってそちらの方向に駆け降りて行くと、小さな何かが落石のように谷に向かって全速力で転がり出した。少なくとも5～6メートルは転がった後、それは私の伸ばした捕虫網の中に納まった。黄緑色の幼いメジロの子であった。

何故私がそんな所にいたかという、仕事で。どうして捕虫網を持っていたかという、一応私も社の昆虫屋なのだった。

さて、正体がわかったところで、私は困惑した。このメジロ、どうしたものか。どうやら頭上で騒ぎ立てているのは親鳥らしかった。捕らえた鳥は巣立ったばかりのようで、目の回りの白い毛もほとんどなく、尾羽もまだまだ短かった。普通なら脅かしてごめん、といって放してしまうべきである。野鳥をむやみに捕らえることができないのも知っていた。しかし、このか弱い子供は、左翼の初列風切りの数枚を残し大部分の羽を失っていた。これではやが

て他の動物の栄養源となることは必至である。それも一つの運命に違いないが、急坂を死に物狂いで転がり、生き延びようとした姿はいかにも哀れだった。

ピーちゃんはその後ひどく脅えることもなく、与えるすり餌をよく食べた。それも、すべての難がそうするように、羽を震わせホシイ、ホシイの格好をして甘えた声で餌をねだった。手のひらにつつんでも嫌がりもせず、指先で頭や首を撫でると目を閉じて喜んだ。ただ、帰りの新幹線のホームでは、箱の中から大きな声でよく鳴いて恥ずかしかったが。

家では高さ50cmほどのダンボール箱の中で飼うことにした。巣はわさびづけが入っていた丸い木箱のなかに脱脂綿とススキの穂を敷いてつくった。ピーちゃんは賢く、決してこの中でうんちをすることはなかったが、手の上ではよく御漏らしをした。大きくなれば、実に何気ないが、その頃のうんちの動作は尻餅をつきそうな腰つきで、小さい

ながらふんばっている様子がみてとれた。また、家にきて4日間は1時間半に1回くらいの間隔でなきながらホシイをするので手がかかった。ピーちゃん、ピーちゃんといいながら餌を与えるうちに、お腹がすくとピーチョッ、と鳴くようになった(この声は、給餌が不要になるにつれ次第に聞かれなくなった)。わずか一週間のうちにピーちゃんは劇的な速度で育った。はっきり言って、鳥は今まであまり好きではなかった。第一、足が爬虫類である。小学校でもウサギ当番はやりたかったが、凶暴なニワトリの当番が恐くて飼育係になれなかった。しかし、ピーちゃんは呼べば答え、自分に向かって飛ぼうとし、手の上で甘え、喜びを全身で表した。鳥がこれほど情緒的な生き物であったとは知らなかった。

鳥と接する中で、親鳥の情愛を感じるとともに普通の生き物が日夜絶えず繰り広げている無数のドラマのことを思った。どんな命にも疑いなく親がいて、生きるためのドラマがある。それを深く心にとめて仕事にあたる責任があることを一羽の野鳥に教えられる思いがした。

(本社調査室・那須尚子)



追記・・・野鳥を許可なく保護することは法律で禁じられている。飼養許可を申請中、結果を待たずピーちゃんは天国へ飛び去っていった。